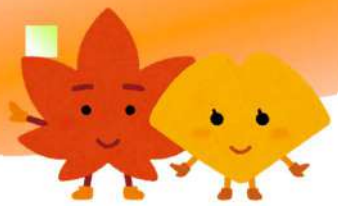

第27号（2022年 秋 号 ）
発 行 日　2022年11月18日

信州大学教職支援センター
Shinshu University
Center for the Teaching Profession

教職支援センター　ニューズレター

巻頭言　【無意識の機能への気づきと教育相談 】

はじめまして。今年度9月に信州大学教職支援センターの教員として着任した，横嶋敬行と申します。みなさんは，人間の情報処理機能（意思決定や行動）の多くは，意識と無意識のどちらの機能によって動かされていると思いますか？・・・同じ質問を「教育相談の理論と実践」の授業を受講している学生にも投げかけてみました。そして，一週間をかけて意識的な行動と無意識的な行動のどちらが多いか，自分の行動を観察してみるようにと課題を出しました。一週間後，コメントシートを通して観察結果を報告させてみると,「無意識的に動くことが多いような気がしていたけれど，改めて自分を観察してみると，身体が無意識に動いている時間の多さに驚愕した」「気がつくと無意識的に動いていて，行動後に自覚することが大半だった」と，多くの学生が自分自身の無意識的な機能について新しい発見を得たようでした。

近年，人の意思決定や行動の9割は無意識によって動かされていると言われており，膨大な研究知見が発表されています。私はレッドブルが大好きなのですが，例えば，このレッドブルを使った面白い無意識の研究があります（Brasel & Gips, 2011）。この研究では，70名の参加者がXbox 360のForza Motorsport 2というレースゲームでタイムトライアルに挑戦しています。参加者はゲームに慣れるための練習を行った後，5種類の車をランダムな順番で1回ずつ操作して，5回のレースを走りました。5種類のうち，1つはレッドブルのペイントを行った車です。レースの結果，レッドブルのペイントを行った車を操作して走った場合だけ，一番早いタイムを記録した参加者が多かったようです。同時に，コースアウトを繰り返すなど，一番遅いタイムを記録した参加者も多かったといいます。車の性能は全く変わらないにもかかわらず。「翼を授ける」というレッドブルのキャッチフレーズ通り,「速い」「大胆」「好戦的」などのエネルギッシュなレッドブルのイメージも無意識的にパフォーマンスを上げてくれるようです。しかし，私はこの研究を知ってから，少なくとも職場のデスクにレッドブルを並べ，飲みながら仕事をすることはなくなりました。なるべくミスの少ない丁寧な仕事を心掛けたいですので・・・（汗）。

無意識の機能への着目は，私たちにたくさんの新しい気づきを与えてくれます。カウンセリングや教育相談においても，相談者の無意識の心への着目が大切にされています。とりわけ，大人と比べて自分の気持ちを言語化する術が拙い児童生徒が相手となる教育相談では，本人の仕草や顔色，発生した問題の文脈，背景にある環境など，さまざまな情報から無意識の心理状態に気づきを向けることが重要だといえるでしょう。しかし，こうした重要性を理論で説いただけでは，なかなか実感を持って実際の児童生徒理解の技能へと結びつけることは難しいものです。そこで，まずは自分自身の無意識の心と向き合ってみよう！と，学生たちに冒頭の課題を投げかけてみたというわけです。無意識という観点から自己理解を深め，その気づきを教師としての児童生徒理解に活かしてほしいと考えています。

COVID-19の流行以降，不登校の子どもたちが右肩上がりに増加しており，子どもたちの心の問題に対する教育相談の重要性も高まっています。このような情勢のなかに未来の教師を送り出していくのだと思うと，教育相談に関する確かな知識と技能を習得して教育現場に旅立ってほしいと強く願います。同時に，学生たちに質の高い学びを届けるために，私自身も研鑽を積まなければと，気持ちが引き締まる毎日です。

引用文献
Brasel, S. A., & Gips, J. (2011). Red bull “gives you wings” for better or worse: A double-edged impact of brand exposure on consumer performance. Journal of Consumer Psychology, 21, 57-64.

横嶋敬行（教職支援センター　助教）

教育実習を終えて

農学部　農学生命科学科
動物資源生命科学コース　4年
太田　千尋

私は農学部の教育実習協力校である伊那市立東部中学校で教育実習をさせていただいた。

振り返るとあっという間の3週間で、実習を終え2週間が経った現在でも、ふと先生方や生徒のことを思い浮かべるほど思い出深い経験となった。

学級指導を担当したクラスは3年生で、当初はなかなか打ち解けてもらえず苦労したが、担任の先生のご支援のおかげで、次第に距離を縮めることができたと思う。その中で、担任の先生と生徒たちが強く結びついた温かいクラスの雰囲気を感じた。

中でも、私が研究授業直前で緊張していた時に担任の先生から「大丈夫。生徒たちを信じて。」と声をかけてもらったことが印象に残っている。その言葉から教師は生徒を指導する立場にあるが、その中に信頼関係があるからこそ生徒は教師に心を開き、ついてきてくれるものだということを学んだ。

また、慣れない指導案づくりだったが、教科指導の先生は私に任せてくださる点が多く、貴重な経験として責任感を持って励むことができた。そして、授業の中では、“生徒の自身の言葉を大切に”という点を指導していただき、重点的に学ぶことができた。その過程で、同じ知識であっても、生徒自身の言葉で答えを述べることで、生徒の理解はより深まるということを学ぶことができた。

私は教育実習に行くまでは、“実際に教師になる”ということについて、具体的に考えていなかった。しかし、実習の中で同じ理科担当の先生が、「授業の流れはいろいろな選択肢があり、今年と来年で指導案を変えてみるといった楽しさがある。だからこそ教師は辞められない。」ということを話してくださったことが印象的で、現職の先生方の教職に対するやりがい感に間近で接することができ、教職に対する印象が変わった。

また、3週間という短い期間では生徒たちとの別れも名残惜しく、より長い期間で関係づくりをしたいとも感じ、長野県の教員になりたいという気持ちが高まった。

このように、私は教育実習を通じて教職の楽しさを感じたと同時に、生半可な気持ちでは務まらない仕事だということも学ぶことができた。

このような貴重な機会を与えてくださった伊那市立東部中学校の先生方や生徒たち、さまざまな場面で支援してくださった信州大学教職支援センターの先生方に感謝申し上げたい。

農学部　農学生命科学科
動物資源生命科学コース　4年
池野　美海

今年の8月に旭山動物園にて博物館実習を行った際の感想を書かせていただきます。実習を行うきっかけとなったのは、大学3年生の秋、北海道の動物園水族館を巡る一人旅をして同園を訪れたことでした。動物について、博物館についてほんの少しだけ詳しくなった私は、同園の取り組みや園運営に対する姿勢に感銘を受け、ぜひここで実習させていただきたいと思いました。旭川の動物園に、長野県の学生が博物館実習に来るという、異例が重なる事態ではありましたが、とてもありがたいことに承諾していただきました。

同園での2週間は、私にとって夢のような時間であり、一生忘れないだろうと思います。初日から、ウサギとモルモットをつれて動物園を飛び出し、地域の図書館で開かれるふれあい教室を見学しました。動物園の役割を果たすには園内を出て活動することも必要なのだと体感しました。2日間にわたる小学生の飼育体験講座では、「動物に会える！動物園の裏側探検！」と意気込んでいた子供たちが、楽しいだけでない動物園の実態にはまっていく姿が印象的でした。他にも、同園で取り組まれている「ボルネオへの恩返しプロジェクト」を通して奈良県の高校生と環境保全について考える会、イオンモールと連携したイベントなど様々な教育活動を運営側から見ることができました。どのイベントにおいても、参加した子供たちの笑顔が沢山見られて、動物園の持つ、人の心を豊かにする力を感じました。

また、旭山動物園での教育活動の理念や学芸員の方の教育観について教わったとき、とても衝撃を受けました。同園では地球の未来を見据えて、動物園ができることを世界規模でとらえて活動が展開されています。私は、動物園の意義、動物園が地域社会に貢献できること、動物園の職員ができることを、今一度深く考える必要があると感じました。

この2週間の経験は、私の人生の財産となりました。私もいつかお世話になった職員の方々と同じ舞台でお仕事ができるように、日々精進してまいります。(※他学部受講で単位を取得しています。)

教職支援センター８～１１月の動き

〇長野県総合教育センター連携講座：「進路指導・キャリア教育の理論と実践」(8 /8～9)、「障害と共生社会」(8/8～9)、「教育の思想と歴史」(8/29～30)＜オンライン＞、〇教職実践演習地域公開研究授業参観(人文学部・理学部（9/6・27）、工学部（10/20・21）、農学部（10/12）、繊維学部（9/7）)、〇教職支援センター拡大打合せ(9/1)、〇教職教育部会(9/8～14)、〇長野県総合教育センターと教職実践演習との協働でカリキュラム研修講座(上田キャンパス（10/6）、松本キャンパス（10/7）)、〇教職教育部会学芸員養成課程実施分科会（9/12）、〇教職実践演習教育委員会等特別講義(人文学部・理学部（11/4・18）、工学部（11/2・9・30）、農学部（11/14・21・28）)、長野県教員育成協議会(11/14)、〇教職支援センター運営委員会（11/15）

地域連携パートナーからのメッセージ

【学習支援ボランティアで「朝日未来塾」を展開 】

朝日村は、松本平の西南部にあり、松本市・山形村・塩尻市に隣接した小さな村です。その87％を山林が占め、レタスなど葉物野菜の栽培が盛んです。あさひプライムスキー場もあり冬場は多くの皆さんが訪れます。

自然豊かな朝日村ですが、地理的に松本市や塩尻市などの市街地から離れているため、子どもたちにとっては通学や学習塾、習い事などには不便であることが課題でした。そこで、信州大学の学生の皆さんの応援をいただき教育委員会の事業として令和２年度から学習教室「朝日未来塾」を立ち上げました。中学生が対象で毎年２０名弱の応募があり、土曜日の午後隔週で開催しています。毎回、約３時間とても集中した学習ができています。

今年は、3年目となり、大学生の皆さんは、１年間同じメンバーが配属されてきますので、事務局からの連絡がスムーズにでき、何よりも中学生と顔見知りになり気軽に相談できる関係が作りやすいと評判です。

中学生からは､「数学が分かるようになった。授業ノートの取り方や復習の仕方も教えてもらった｣(中２)「全然分からなかった英語のテストのやり直しを教えてもらい、全て確認できた。学生さんと話ができてとても楽しかった。 」(中２）など、学生さんに教えてもらって分かった喜びを綴っています。また､「数学を大学生とやって、できないといつも逃げていた問題も丁寧に教えてもらい、すごく分かりやすかった。 」（中３)「答え合わせは一人でやるものだと思っていたが、間違えたところの理由を学生さんと確認してアドバイスをもらえたのが新鮮でうれしかった。 」(中３）と学生さんから新たな自分を発見させてもらう中学生の姿も見えるようになりました。

学生さんからは「中学生が問題を解いた後に「わかった」と言ってくれたのがとても嬉しかった。真剣な表情で聞いてくれたので私も自信をもって伝えられた。 」等中学生に上手く教えられた喜びを感じている感想が多くなりました。また､「英語の教え方で悩んでいました。いざやってみると意外にロジカルに伝えられ面白かった。こんな暑い日でも元気いっぱいな中学生を見て、我々はいつこの元気を失ったのかと思っています。元気にチャーミングに、でも地に足をつけて責任ある指導をしたい。 」｢私が説明をしている途中でも「ここが分からない」と進んで自分の意見を述べてくれて私の勉強にもなった。 」とこちらも自分自身の成長につながる新しい自分を見出していく姿があります。中学生も大学生もこの朝日未来塾という場で相乗的に自らを耕している様子が見て取れます。

今後は、大学生の真摯で積極的な姿勢に感謝しつつ、大学生自身の中学校時代の話など中学生にはとても身近な説得力のある伝わり方をもっと活用させていただき、さらに、生徒の学力を向上させていく手だて（指導計画）の模索やその体制作りに学生さんにもかかわってもらいたいと思っています。

よろしくお願いいたします。

（朝日村教育委員会　上條まゆみ）

編集後記

今号､巻頭言でご紹介したのは､今年の9月より新しく教職支援センターに着任した横嶋敬行（よこしま･たかゆき）先生です。新体制の当センターを､今後ともどうぞよろしくお願いいたします｡その他にも今号では､教育実習報告､博物館実習報告､地域連携パートナーからのメッセージ､とバラエティ豊かな原稿を寄せていただきました｡皆様に少しでも当センターの活動の様子を知っていただければ幸いです｡（広報担当　河野桃子）

信州大学 SHINSHU UNIVERSITY | 教職支援センター

■〒390-8621　長野県松本市旭3-1-1　■TEL：0263-37-3367　■MAIL：kyousho@shinshu-u.ac.jp
■URL：https://kyoushoku.shinshu-u.ac.jp/kyoushoku/cms/